

ベランダバードウォッチ 2016 年冬の報告

バードリサーチ・日本野鳥の会栃木

今年も早や鳥たちの繁殖シーズンになりました。冬の間、私たちを楽しませてくれた冬鳥たちも多くは繁殖地へ旅立っていきました。2016/2017 年の冬（以下 2016 年冬）は、気象庁の発表によれば全体的に暖冬とのことで北日本では降雪量が少なかったようです。それでも、北海道の 12 月の降雪量は平年並みで、1 月以降には、時おり冬型の気圧配置が強まり西日本の日本海側の地域では大雪も降りました。一方、太平洋側は、昨シーズンとは違いほとんど大雪も降らず、晴天の多い冬でした。このような気象状況のもと、2016 年冬の鳥たちの生息状況はどうだったのでしょうか。ここでは身近な冬鳥たちにスポットを当てて以下に報告します。

調査状況

2016 年冬の調査は、北海道から九州までの 54 名により、家の周りの調査が 47 か所で、家での調査が 30 か所で行なわれました（図 1）。家の周りの調査は、調査地数が増加したものの、昨シーズンから継続した調査地は 27 か所にすぎませんでした。この調査は、継続が命です。ぜひ、1 年でも長く調査に参加していただければと思います。

大まかな地域別の調査地は、どちらの調査も山梨県を含めた関東地方が最も多く、家の周り 21 か所(47.7%)と家 18 か所 (48.6%) でした。しかし、数は少ないものの北海道をはじめ中部東海地方や近畿地方、四国、中国、九州地方でも調査が実施されました。今シーズンも東北地方や信越・北陸地方からの参加はありませんでした。

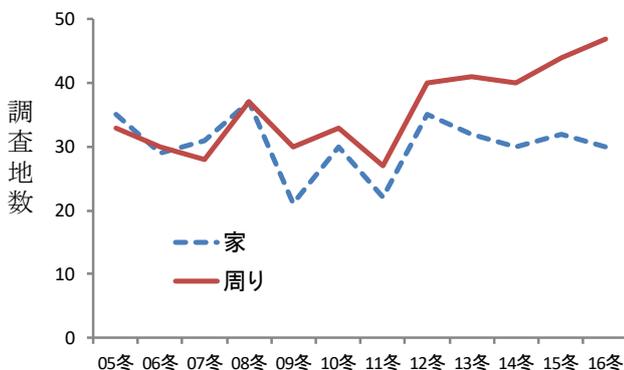


図 1. 調査地数の推移

記録状況

2016 年冬は、家の周りとは家での調査を合わせて合計 115 種が記録され、このうち家の周りの調査が 112 種、

家での調査が 60 種でした（付表）。家の周りの調査が家での調査より記録種数が多いのは例年どおりです。特に、付表をみるとカモ類やシギチドリ類などおもに水辺に生息する種は、そのほとんどが家の周りの調査地で記録されました。このことから、家の周りの調査地は住宅地だけでなく河川や池、海岸付近の水辺など多様な環境を含んでいることが分かります。

主要な冬鳥の記録状況

調査状況で報告したように、調査地は昨冬の調査から 3 分の 1 近くの調査地が入れ変わっています。そのため、2016 年冬の記録状況を昨年冬と比較した場合に、全調査地による記録率は調査地の違いに多少左右されることが予想されます。そこで、ここではカワラヒワ、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、シメの記録率を 2015 年冬と 2016 年冬の両方の記録のある調査地で比較しました。

・家の周りの調査

家の周りの調査は、1 年を通して調査を実施し、10 日ごとに記録された種とその個体数を概数で報告します。解析には、両年とも調査が実施されかつ調査回数が 80%以上の関東から九州の 15 か所の調査地を対象に、両年とも 10 月から翌 2 月までの結果をもちいました。記録率は、各種の記録回数を全調査回数で除した値です。

まず、シロハラ、ツグミ、ジョウビタキ、シメの記録率は、2016 年冬のほうが 2015 年冬より高いことがわかりました（図 2）。特に、ツグミでは 2015 年の記録率が 0.53 だったのが 2016 年では 0.59 と顕著でした。

一方、カワラヒワの2016年冬の記録率は0.43で、2015年冬の0.52より著しく低いことがわかりました。

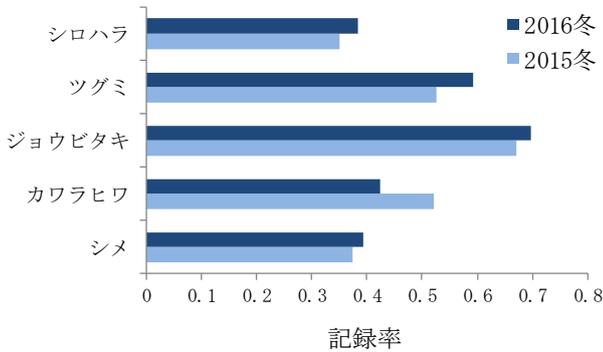


図2. 家の周りの調査による主要な冬鳥の記録率の比較. 2015, 2016年ともに調査が実施された15か所の調査地の結果

次に、これら5種の10日ごとの記録率の推移を2016年冬と2015年冬で比較しました(図3)。これらの図からも2016年の冬は、記録率の高低に多少ばらつきがあるものの、カワラヒワを除くと2015年冬より記録率が高い期間が多いことがわかりました。特に、ツグミでその傾向が強いことがわかりました。一方、カワラヒワは、11月下旬以降ほとんどの時期で2016年冬の方が2015年冬より記録率が低いことがわかりました。なお、2016年冬の10月から11月上旬の初冬期の記録率は、ツグミを除くと2015年冬と同じかやや低い傾向がありました。しかし、シロハラとツグミ、ジョウビタキでは、初冬期の記録率のピークが2015年冬より高く、しかもツグミでは10日ほど早く記録されました。

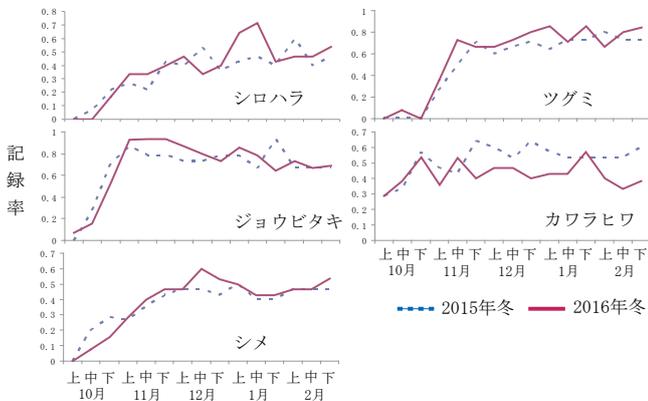


図3. 家の周りの調査地による主要な冬鳥の記録率の季節変動の2015年冬と2016年冬の比較。調査地は図2と同じ

・家での調査

家の周りの調査で解析した主要な冬鳥5種の記録率を2016年冬と2015年冬ともに調査した21か所の記録率を比較しました。家での調査では、家の周りの調査とやや違った結果が得られました(図4)。シメの記録率は両年ともほぼ同じでしたが、ジョウビタキとツグミでは2016年冬のほうが2015年冬より低い傾向がありました。一方で、カワラヒワとシロハラは家の周りと同じ傾向がみられました。カワラヒワの記録率は2016年冬の方が2015年冬より低く、シロハラは2016年冬の方が高かったのです。シロハラは記録された調査地数でみても2016年が8か所で2015年が5か所と2016年がやや多いことがわかりました。ジョウビタキとツグミの記録率が両調査で違った傾向が得られたのは、両調査における調査地の違いや調査回数、調査時期の違いなどが関係しているのかもしれませんが。家の周りの調査の方は、冬鳥の渡来初期の10月や11月が含まれます。この季節、ジョウビタキはさかんになわばりを占有するためにアンテナなどの目立つところで鳴きます。また、ツグミも小群で飛び回りカキの実などに飛来します。こうした両調査における調査時期の違いが大きく関わっているように思われます。

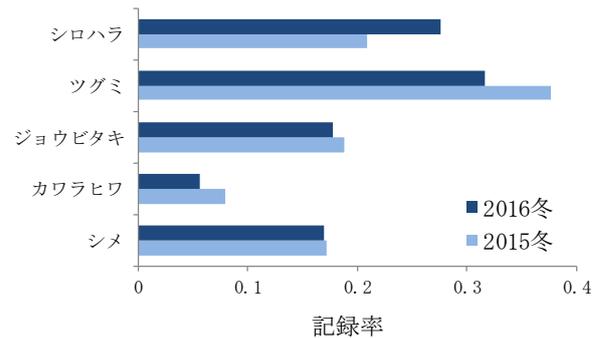


図4. 家での調査による主要な冬鳥の記録率の2015年冬と2016年冬の比較。記録率は、両年とも調査が実施された北海道から九州までの21か所の調査地の結果に基づく

・7年間のカワラヒワの記録率

2016年冬で家の周りおよび家での調査の両方で、記録率が低かったカワラヒワの7年間の10日ごとの記録

率の季節変動を解析しました（図 5）。解析には、7 年間継続して家の周りの調査が実施された 15 か所の 10 日ごとの結果を用いました。カワラヒワは、留鳥のため冬鳥とは違い記録率の季節変動が複雑です。しかし、1 年を通した記録率は、ほとんどの年で 10 月上旬に最低になり、その後は徐々に上昇しました。ところが、2016 年冬は過去 6 年の冬と比較すると 11 月以降も記録率が低い状態で推移しました。長期的にみても、カワラヒワの 2016 年冬の記録率は著しく低いことがわかりました。

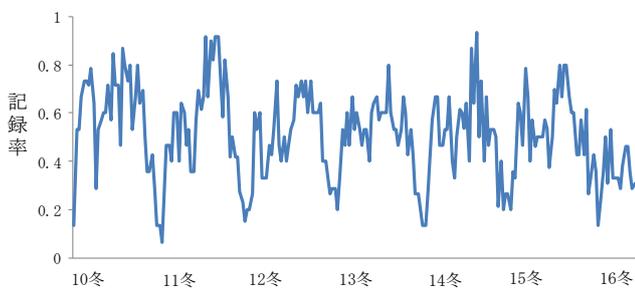


図 5. 家の周りの調査によるカワラヒワの記録率の 7 年間の季節変動。調査地は図 2 と同じ

2016 年冬のまとめ

冬は、住宅地などの公園の小規模な緑地でも繁殖期に比べて多くの種が生息することが知られています。また、冬鳥の生息状況はその冬の積雪などの気象状況や冬の食糧となる木の実の豊凶にも左右されます。そのため、自宅周辺の身近な鳥類を調査対象としたベランダバードウォッチでも冬鳥の生息状況の年による違いが得られやすいと考えられます。

上記のように、2016 年冬の市街地周辺に生息する主要な冬鳥 5 種の記録状況は、シロハラやツグミ、ジョウビタキ、シメでは 2015 年冬よりその記録率が高い傾向が得られました。一方で、カワラヒワは逆に記録率が低い傾向がありました。記録率が高いということは個体数の多さと相関があると考えられます。とすると、2016 年冬は 2015 年冬に比べてカワラヒワを除くと冬鳥が多かったのではないのでしょうか。兵庫県神戸市付

近では、シロハラやツグミの個体数が前年より多かったとの情報もあります（渡辺美郎氏私信）。飛来する個体数が多かったとすると、昨夏の繁殖地での繁殖成績が良かったのでしょうか。それとも、日本国内での秋冬期の気象状況や餌資源の問題なのでしょうか。冒頭で紹介したように 2016 年冬は全国的に暖冬で降雪量も少ないとのことでした。しかし、関東などでは秋にズミなど山地の木の实が不作のところが多かったようです。今回解析に用いた主要な冬鳥のうちツグミとシロハラは秋口にズミなどの木の实を群れで食べる種です。山地の林に木の实が少なかったために、ベランダバードウォッチの調査地である市街地周辺で多く観察されたのかもしれませんが。ただし、10 月中下旬の飛来初期の記録率は、ツグミを除くと必ずしも 2015 年冬より高い傾向はありませんでした。初冬期のツグミの記録率が 2015 年冬より高く、さらにシロハラとジョウビタキでは記録率のピークが高い傾向がありました。これらの種は、山地の木の実の不作と関係している可能性があります。

一方で、カワラヒワの記録率は家の周りとは家で調査の両方で 2015 年冬より低いことがわかりました。さらに、2016 年冬の家の周りの調査による記録率は、過去 7 年間でも最低でした。カワラヒワはわが国で繁殖する留鳥ですが、冬には大陸から飛来する亜種オオカワラヒワも加わります。本種は、シデ類やニレなどの木の実のほかさまざまな草本植物の種子を主食としています。2016 年冬は、降雪量が少なかったために北日本に留まる個体が多かったのかもしれませんが。また、本種は秋冬季には群れになって活動し、郊外の屋敷林が点在する農耕地や林の林縁付近に多く生息し、草むらの少ない街中にはあまり多くありません。そのため、2016 年冬に記録率が低かったのは、ベランダバードウォッチの調査地ではもともと個体数が少ないことに加え、街路樹などの木の実が少ないことでカワラヒワが郊外に多かったのかもしれませんが。これを裏付けるように、家の周りの調査地のうち郊外の調査地では、や

や大きな群れの記録率が高い傾向が得られていました。2016年冬に農耕地でカワラヒワの個体数が多かったかどうかは、バードリサーチが別に実施している冬鳥ウォッチの結果と比較することでもう少しはっきりすると思われまます。

いずれにしても、冬鳥の生息状況と冬の気象状況や餌資源などとの関係を明らかにするにはさらに多くの調査地が必要です。そうすることで、記録率を地域別に比較することができ、どの地域が多かったのか少なかったのかを知ることができます。今後もぜひご協力いただければ幸いです。

ところで、今回ご報告した内容はみなさんの調査地の結果と同じだったのでしょうか。それとも違った状況だったのでしょうか。さらに2017年冬はどうなのでしょうか。今から楽しみです。

最後に、ベランダバードウォッチ冬の調査も2016年冬で12年が経ちました。この調査は、バードリサーチが実施している参加型調査のなかでは最も古い調査の一つです。同じ調査を長年継続することは大変な労力

を必要とします。しかし、その一方で今回ご報告したカワラヒワの記録率のように、年による著しい違いが得られることもあります。やはり継続は力なりです。この報告書がお手元に届くころには2017年繁殖期の調査が始まっているところと思います。ぜひ、繁殖期の調査も継続してご参加いただければ嬉しいかぎりです。なお、末尾ながら2016年冬の調査にご参加いただきました皆様のご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。

飯泉仁, 石口富實枝, 石原渉, 石丸英輔, 入舩憲一, 岩谷, 大出水幹男, 大門明美, 大門聖, 大塚啓子, 沖田絵麻, 加藤智子, 川畑紘, 黒沢令子, 小荷田行男, 小林俊子, 小堀脩男, 齋藤映樹, 坂田樹美, 佐藤司, シェリー, 白石健一, 白石ひとみ, 鈴木遼太郎, 須田由美, 高橋雅子, 高橋佳子, 高山裕子, 竹内敦子, 武谷由紀子, 辰巳文吾, 田中利彦, 長嶋宏之, 西尾紀子, 西尾喜量, 西村章, 丹羽和夫, 平野敏明, 藤原淳子, 古川紀美子, 別府史士, 松平晶子, 三上かつら, 三田長久, 宮崎征志, 安田耕治, 山口洋, 横山哲也, 横山由里子, 吉川明宏, 吉谷将史, 吉中康展, 吉邨隆資, 渡邊ケイコの各氏。

とりまとめ：平野敏明

付表1. ベランダバードウォッチ2016年冬の調査記録種一覧

No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り	No.	種名	家	周り
1	キジ	○	○	30	コチドリ		○	59	ミヤマガラス		○	88	コサメビタキ		○
2	オカヨシガモ		○	31	シロチドリ		○	60	ハシボソガラス	○	○	89	キビタキ		○
3	ヨシガモ		○	32	ヤマシギ		○	61	ハシブトガラス	○	○	90	カヤクグリ		○
4	ヒドリガモ		○	33	アオシギ		○	62	キクイタダキ		○	91	スズメ		○
5	マガモ	○	○	34	タンギ		○	63	コガラ		○	92	キセキレイ		○
6	カルガモ	○	○	35	クサシギ		○	64	ヤマガラ	○	○	93	ハクセキレイ		○
7	ハシビロガモ		○	36	イソシギ		○	65	ヒガラ	○	○	94	セグロセキレイ		○
8	オナガガモ		○	37	ユリカモメ		○	66	シジュウカラ	○	○	95	ビンズイ		○
9	コガモ	○	○	38	セグロカモメ		○	67	ヒバリ		○	96	タヒバリ		○
10	ホシハジロ		○	39	ミサゴ	○	○	68	ショウドウツバメ		○	97	アトリ		○
11	キンクロハジロ		○	40	トビ		○	69	ツバメ	○	○	98	カワラヒワ		○
12	スズガモ		○	41	オオワシ		○	70	ヒヨドリ	○	○	99	マヒワ		○
13	カイツブリ		○	42	ツミ		○	71	ウグイス	○	○	100	ベニマシコ		○
14	キジバト	○	○	43	ハイタカ		○	72	エナガ	○	○	101	ウソ		○
15	カワウ	○	○	44	オオタカ		○	73	オオムシクイ		○	102	シメ		○
16	ゴイサギ		○	45	ノスリ		○	74	メジロ	○	○	103	イカル		○
17	アマサギ		○	46	フクロウ		○	75	ゴジュウカラ	○	○	104	ホオジロ		○
18	アオサギ	○	○	47	アオバズク		○	76	ミソサザイ		○	105	ホオアカ		○
19	ダイサギ	○	○	48	カワセミ		○	77	ムクドリ	○	○	106	カシラダカ		○
20	チュウサギ		○	49	コゲラ		○	78	トラツグミ		○	107	ミヤマホオジロ		○
21	コサギ	○	○	50	アカゲラ		○	79	マミチャジナイ		○	108	アオジ		○
22	クイナ		○	51	アオゲラ		○	80	シロハラ	○	○	109	クロジ		○
23	ヒクイナ		○	52	チョウゲンボウ		○	81	アカハラ	○	○	110	コジュケイ		○
24	バン		○	53	コチョウゲンボウ		○	82	ツグミ	○	○	111	ドバト		○
25	オオバン		○	54	ハヤブサ		○	83	ルリビタキ	○	○	112	ホンセイインコ		○
26	カッコウ		○	55	モズ		○	84	ジョウビタキ	○	○	113	ガビチョウ		○
27	ヒメアマツバメ		○	56	カケス		○	85	ノビタキ		○	114	ソウシチョウ		○
28	ケリ		○	57	オナガ		○	86	イソヒヨドリ	○	○	115	ハッカチョウ		○
29	イカルチドリ		○	58	カササギ		○	87	エゾビタキ	○	○		合計種数		60 112